徳洲会 呼吸器部会

肺がん研究会・症例検討会

診療能力向上で研鑽

瓜生・新部会長が就任の挨拶

徳洲会呼吸器部会は5月11日、京都市で第11回肺がん研究会・第9回症例検討会を開催した。徳洲会オンコロジー（腫瘍学）プロジェクトの一環で、肺がんなど呼吸器疾患の診療能力の向上を図るのが目的。医師、薬剤師、看護師、臨床検査技師など約70人が参加し、幅広い症例を共有した。

呼吸器部会部会長に就任した瓜生部長

冒頭、3月から部会長を務める八尾徳洲会総合病院（大阪府）の瓜生恭章・呼吸器内科部長兼腫瘍内科部長が「前部会長がつくり上げた部会で、引き続き皆さんの臨床のお手伝いができればと思います」と意気込みを語った。

続いて、新しく部会内の学際連携委員長に任命された湘南鎌倉総合病院（神奈川県）の深井隆太・呼吸器外科部長は「患者さんに貢献していくために、外科医として知識を共有したり、皆さんの意見を聞いたりする場としていきます」と期待を寄せた。

症例検討会では、まず大隅鹿屋病院（鹿児島県）の田村幸大副院長が**「長期休薬後にニボルマブ再投与が著効した肺腺癌の一例」**と題し発表。同様の報告が少ないなか、「今回、投与再開で再奏効した症例を経験しました。奏効例に関しては、再投与も選択肢と考えられます」とまとめた。

八尾病院の小西千尋薬剤師は**「当院で経験したROS1融合遺伝子陽性肺癌の一例」**をテーマに発表。希少肺がんであるROS1融合遺伝子陽性肺がんの診断に至った流れを説明、「クリゾチニブ投与により著明な腫瘍縮小を認め、現在までに重篤な有害事象は認めていません」と治療継続中であることを報告した。

千葉西総合病院の小嶺将平・内科医師は**「de novo T790M陽性肺癌の一症例」**と題し発表。診断では組織生検の重要性を強調、治療ではアファチニブで効果が少なく、オシメルチニブへの変更で効果を得たと報告、「本症例の一次治療薬として、今後さらに重要になると考えられます」と示した。

深井部長はレクチャーも担当

湘南鎌倉病院（神奈川県）の皆川由美子・放射線腫瘍科医長は**「胸腺腫瘍に対する集学的治療の一環としての放射線治療の有効性」**をテーマに発表した。胸腺腫瘍は慎重に長期の経過観察を継続し、局所再発や新規病変に対し、積極的に放射線治療を含めた集学的治療を行うことが、良好な長期予後に寄与する可能性を示唆。「再照射でも治療効果が十分に見られるので、治療の選択肢として検討すべき」とアピールした。

4題終えたところで肺がんレクチャー1として、徳洲会オンコロジープロジェクトの新津洋司郎顧問（札幌医科大学名誉教授）が**「KRAS及びBRAF変異肺がんの新しい治療戦略」**と題し講演。KRAS変異がんは、肺がんの原因遺伝子のなかで発生頻度が高いにもかかわらず、悪性腫瘍を制圧する治療戦略は開発されていない。BRAF変異がんは特異的な分子標的薬が開発されていながらも、耐性が生じやすいなど問題点が指摘されている。

新津顧問はこれまでの研究を通じて解決の糸口を見出し、「両がん種に対する特異性の高い治療法の開発に着手しました」と概要を解説した。

肺がんの新しい治療戦略に関し講演する新津顧問

症例検討会に戻り、名古屋徳洲会総合病院の宇賀神基・呼吸器内科部長が**「肺炎入院症例における入院時の血漿（けっしょう）プレセプシン値の臨床的意義」**をテーマに発表。同院での肺炎入院症例を通じ、入院時の血漿プレセプシン（敗血症診断マーカー）値の臨床的意義について検討。結果、同値は予後予測指標となり、「既存の肺炎重症度評価に追加の情報を提供し得ます」と報告した。

湘南鎌倉病院の杉本栄康・呼吸器内科部長は**「限局性気管支拡張症が発症に寄与した可能性が示唆された関節リウマチ（RA）の一例」**と題し発表。同症例では、関節炎症状を発症する以前からリウマトイド因子が高力価であったことが確認されており、抗CCP抗体産生といった免疫異常がRAの発症に先行していたと推察。「病理組織学的にもRA発症と気管支拡張症との関連が示唆されました」と結んだ。

湘南藤沢徳洲会病院（神奈川県）の堀内滋人・呼吸器内科医長は**「経皮的心肺補助装置（PCPS）で救命しえた大量喀血（かっけつ）の一例」**をテーマに発表した。同症例はPCPSにより出血を助長する懸念もあったが、過去の報告を参考に導入。人工肺の使用が困難な場合、「PCPS導入も選択肢であることが示唆されました」と示した。

7題の発表の後、肺がんレクチャー2として、深井部長が**「需要が増している膿胸（のうきょう）治療～外科的掻爬（そうは）、気管支充填、そしてひたすらドレナージ（CT下ドレナージの多用）」**と題し講演。急性膿胸について①手術できなそうな患者さんにはドレナージ（排膿（はいのう）法）と抗生剤で治る可能性がある、②治療開始後10日で治癒しない場合は外科に相談すべき、③ドレナージ後リークができた（有瘻性）場合、気管支充填で治る可能性がある――など臨床的アドバイスを送った。

最後に和泉市立総合医療センター（大阪府）の益田典幸・特別顧問兼臨床研究センター長が各発表を振り返り総評した。症例検討会終了後には、他団体主催の講演会を開催。京都府立医科大学大学院医学研究科呼吸器内科学の内野順治准教授が「肺がん治療の最新の知見」、髙山浩一教授が「肺がんのゲノム医療」をテーマにそれぞれ講演した。

病院マネジメント

国際医療福祉大学大学院 武藤教授が講演

鹿児島病院

鹿児島徳洲会病院は院内で教育講演会を開いた。講師は国際医療福祉大学大学院の武藤正樹教授。池田佳広院長が同大学院修了生で、今回、武藤教授とゼミ生が鹿児島県を訪れることになり実現した。当日は鹿児島病院の職員をはじめ学生、近隣の医療従事者が参加した。

武藤教授は「医療と介護のクロスロード～入退院支援センターと病院経営～」と題し、講演。前半は、最近の診療報酬改定に触れ、あらためて地域包括ケアシステムの構築、医療機能の分化・強化、連携の推進といったキーワードが重要と指摘した。具体的に診療報酬の項目を挙げ、とくに入院医療について解説。入院基本料、地域包括ケア病棟、回復期リハビリテーション病棟の変更点などをわかりやすく説いた。

後半は、主に入退院支援の重要性を強調。患者さんが安心して入院から在宅復帰できるように、入院前からサポートすることの大切さを訴えた。すでに取り組んでいる病院を全国から複数ピックアップし、そのひとつに中部徳洲会病院（沖縄県）が挙がった。

職員を中心に多くの医療従事者が参加

最後にPFM（Patient Flow Management）の考え方を紹介。PFMは予定入院患者さんの情報を入院前に把握し、問題解決を早期から図ると同時に、病床管理を合理的に行うことなどを目的とする院内の組織と説き、この考え方をうまくマネジメントに生かしている病院の例などを紹介した。このほか介護報酬改定にも言及し、介護医療院などについて説明した。

終了後、池田院長は「貴重な機会になりました。当院の幹部と教育に力を入れていきたいと話しているので、今後も外部講師による講演を行っていく考えです」と意欲的。

訪れた学生に対し病院見学も実施。院内を案内した後、池田院長が講演し、宇和島徳洲会病院（愛媛県）の院長時代を含め、マネジメントでの成功例を紹介しながら、自身の考え方や手法を示した。

企画多彩で大盛況

茅ヶ崎病院が病院祭

茅ヶ崎徳洲会病院（神奈川県）は5月12日、第4回病院祭を開催した。晴天に恵まれ地域の方々など約4500人に上る来場者でにぎわった。

立川隆光院長は「病院祭の目的は地域の皆さんと病院との垣根を少しでも低くすることです。一日楽しんでください」と開会挨拶。

吹奏楽や津軽三味線、ジャズ、フラダンスなど多彩なステージプログラムに加え、ヨーヨー釣りやバルーンアート、ミニ電車など子ども向けのコーナー、地元商店による焼き鳥や唐揚げ、和菓子など出店、同院職員による模擬店など飲食コーナーも充実。医療講演や健康相談、血管年齢・骨密度など測定会、徳洲会体操クラブの子ども向け体操体験会も好評だった。来場者は「子ども向けの企画が多く嬉しいです。ステージイベントも充実し楽しめました」と笑顔。

大勢の来場者でにぎわった病院祭

「看護師さんのすごさ実感」

札幌南病院で看護体験

血圧測定を行う参加者

徳洲会グループで唯一、ホスピス（終末期医療）病棟をもつ札幌南徳洲会病院は5月10日、ふれあい看護体験を行った。地元の高校から3年生6人が参加し、看護の仕事について学んだ。すべて看護大学もしくは看護専門学校への進学希望者。

参加者は工藤昭子・看護部長から看護の日（5月12日）の説明を受けた後、院内を見学。その後、病棟に赴き患者さんにバイタルサイン（生命兆候）の測定や車いすの介助などを行った。患者さん側の視点として、互いに血圧を測ったり、実際にベッドに横たわって処置を受けたりする擬似体験も行った。昼食時には、患者さんに提供している食事を実食。常食、ペースト食、刻み食を味わい、味付けや食べやすさなど多様な工夫を施している点に驚いていた。

関連施設の特別養護老人ホームコスモス苑を見学した後、最後に四十坊克也院長がエールを送った。参加者のひとり、中村早那さんは「ホスピスというと悲しいイメージがありましたが、患者さんが明るく楽しく過ごされていました」と振り返った。寿崎友里七さんは「あらためて看護師さんのすごさや命の大切さを実感しました」と目を輝かせていた。

参加者の控え室には、他職種がそれぞれの仕事内容を紹介したカードを貼付。チーム医療をイメージ